



日本音楽教育学会ニュースレター 第75号

目 次

1 学会からのお知らせ

1. 日本音楽教育学会第50回大会（東京大会）予告 佐野 靖 2

2 委員会からのお知らせ

1. 編集委員会より—是非とも多くの投稿を 水戸 博道 3
2. 第9回夏季ワークショップ in 弘前（第一次案内）
つくってあそぼう—地域の芸術経験を目指して 高橋 憲人 3
3. 学会法人化検討ワーキンググループ報告 北山 敦康 4
4. 選挙管理委員会からの報告とお知らせ 水崎 誠 4

3 音楽教育の窓

1. 〈連載〉音楽・教育・学校（18）
音楽科の学力と「ふしづくりの教育」 吉富 巧修 5
2. 「学びを深める ICT 活用—音楽科教育の未来を考える—」
意見交換会第1回・第2回 深見友紀子 6
3. 音楽教育の本質的なありかたを求めて—降矢美彌子氏の仕事 尾見 敦子 7

4 会員の声

1. 外国につながるのある子どもたちをめぐる音楽の可能性 磯田三津子 8
2. 日本音楽教育学会に入会して 藤田 和也 9
3. 日本音楽教育学会入会にあたり 中野 圭祐 9
4. 会員の新刊・近刊等紹介 10

5 報告

1. 平成30年度第4回常任理事会 11

6 事務局より

[編集後記]

16

1 学会からのお知らせ

1. 日本音楽教育学会第50回大会（東京大会）予告

大会実行委員会委員長 佐野 靖

日 時：2019年10月19日（土）、20日（日）

場 所：東京藝術大学音楽学部（東京都台東区上野公園12-8）

学会設立50周年を迎える今年の東京大会は、本学会にとって大きな節目となる第50回の記念大会となります。大会実行委員会のテーマはまだ確定していませんが、第49回岡山大会の「音楽教育学の地平を拓くために」を受け継ぎ、隣接諸科学の知見も交えながら、これからの音楽教育研究のあり方を展望する大会にしたいと考えております。

共同企画や口頭発表・ポスター発表に加えて、常任理事会・国際交流委員会の共同企画によるプロジェクト研究や、隣接諸科学の専門家を交えた実行委員会企画も予定されています。

たくさんの皆様のご来場をお待ちしております。

発表募集（共同企画・口頭発表・ポスター発表）

6月13日（木）15:00 締切

前回の岡山大会とは、発表募集の締切が異なります。

- * 応募するためには2019年度までの会費を5月31日（金）までに納入する必要があります。
- 入会して発表することを希望される方は5月31日（金）までに入会申込と会費納入を完了してから応募して下さい。
- * 「口頭発表」「ポスター発表」では1名を上限として非会員を連名発表者に加えることができます。なお、非会員の発表者は臨時会員として参加することが望まれます。
- * 「共同企画」は会員が代表です。代表者を含む2名以上の発表者が会員であれば複数の非会員の発表が可能です。
- * 発表件数の上限は一人2件です。
- * 詳細は同封の大会研究発表応募要領をご覧ください。

多くの会員の応募をお待ちしています。

2 委員会からのお知らせ

1 編集委員会より—是非とも多くの投稿を

編集委員会委員長 水戸 博道

2月11日(月)明治学院大学において、2019年度第5回編集委員会を開催致しました。委員会においては、『音楽教育学』への投稿論文8本の採否について審議を行いました。その結果、再査読の研究論文1本が掲載不可となり、新規投稿の研究論文6本については3本が修正の上再査読、3本が掲載不可となりました。また、研究報告1本は修正の上再査読となりました。

編集委員会では、丁寧な査読を行い論文の細かい修正等を行なう等、掲載論文を増やす様々な努力を行なっています。しかし、初回の投稿時に「投稿規定に従っていない」「誤字脱字等のケアレスミスが多い」「明らかな論理的矛盾がある」といった準備不足が散見されることもあります。投稿者には、原稿を丁寧に見直したり、自分の論文を他の研究者にも見てもらい参考意見を聞くといった準備を投稿前に行っていただくと、採択される論文もさらに増えていくと考えます。

このところ投稿数が伸び悩んでいるのが大変気がかりです。是非とも多くの方から投稿をいただき、学会誌を充実したものとしていきたいと考えております。

『音楽教育学』次回投稿締め切りは5月15日(水)です。

2 第9回夏季ワークショップ in 弘前 (第一次案内)

つくってあそぼう—地域の芸術経験を目指して—

弘前ワークショップ企画立案リーダー 高橋 憲人

ファシリテーター：長谷川諒(神戸大学)・高橋憲人(弘前大学)・今田匡彦(弘前大学)

日 程：2019年8月11日(日)・12日(月・祝)

会 場：スペース・デネガ(青森県弘前市上瓦ヶ町11-2) <http://www.geocities.jp/spacedenega/>

参 加 費：会員1,000円(非会員1,500円)※大学生以下無料

申込フォーム：HP内のフォームよりお申し込みください

<https://onkyoikuhirosakiws.wixsite.com/home>

申 込 切：7月31日(水)

問 合 せ：onkyoiku.hirosakiws@gmail.com

【企画案】

1日目 サウンドペインティング(ハンドサインを用いたグループ即興演奏)

2日目 日用品を用いたスタンピングと、それを図形楽譜に見立てた演奏

【弘前市へのアクセス】

弘前観光コンベンション協会HP(<https://www.hirosaki-kanko.or.jp/web/edit.html?id=access01>)をご覧ください。

3 学会法人化検討ワーキンググループ報告

常任理事 北山 敦康

先の法人化検討から5年が経過し、本年度また新たにワーキンググループが編成され、学会の法人化に関する調査・検討が行われました。その途中経過については、岡山大会での総会でご報告した通りです。その折に、会員の皆様からのご意見を募集しましたが、これまでにどなたからもご意見はありませんでした。その後もワーキンググループでは検討を重ね、2月の第4回常任理事会において、本年度の経過のまとめと来年度以降の方針について、以下のような報告と提案をさせていただきました。

- 1) 現段階では本学会の一般社団法人への移行を急ぐ必要はないが、将来的にはいつでもその対応ができるような準備をしておく必要がある。
- 2) 将来的な法人化と今後の安定的な学会運営のために、①諸規定の見直し、②会計システムの見直し、③学会誌編集システムの見直しの3点を来年度の課題として改革を進める必要がある。
- 3) 改革案の検討に際しては、学会の将来的な発展を見据えて、若手会員の積極な参加を求め、諸規定の見直しに関しても、理事の任期や被選挙権の上限年齢等を検討する必要がある。

以上のことに向けて、新年度に新たなワーキンググループが編成されることが予想されます。会員の皆様には、ご協力をよろしくお願いいたします。

4 選挙管理委員会からの報告とお知らせ

選挙管理委員長 水崎 誠

第24期選挙管理委員として、味府美香、高木夏奈子、中里南子、長谷川恭子、水崎誠の5名が今川恭子会長から委嘱を受け、互選により水崎が委員長、味府委員が副委員長に選出されました。選挙管理委員会では公正かつ正確な選挙事務の遂行に努めますので、ご理解とご協力をお願い申し上げます。第24期日本音楽教育学会会長・理事選挙は、「日本音楽教育学会会則」「日本音楽教育学会細則」「日本音楽教育学会選挙管理委員会規定」「日本音楽教育学会会長・理事選挙実施要領」に則りおこなわれます。これら会則等は、すべて日本音楽教育学会のホームページ上で閲覧が可能です。

「日本音楽教育学会会則」(第三章第10条)には、「(1) 会長は、正会員の直接選挙によって選出する。」「(3) 理事は、各地区において会員の直接選挙によって選出する。」とあります。このため、会員の皆様には2019年6月に被選挙者名簿と投票用紙等の選挙関係書類一式を郵送でお送りします。この選挙によって、今後の学会活動の中心的役割を担う会長・理事を選出することになります。2019年7月1日(月)(当日消印有効)までに、投票の方をよろしくお願いいたします。



3 音楽教育の窓

〈連載〉音楽・教育・学校 (18)

1 音楽科の学力と「ふしづくりの教育」

吉富 巧修 (広島大学名誉教授)

定年を迎えるころから、「音楽科における学力」について考えることが多くなった。小学校学習指導要領の「目的」や「内容」を検討すると、「学力の測定可能性」という視点からは、「ハ長調及びイ短調の楽譜を見たりして歌う技能」は、多くの時間と人手を要するが、実際に楽譜を提示して、児童に歌ってもらい、それを評価すれば、この技能が獲得されたかが判然とする。さらに、「指導計画の作成と内容の取扱い」の最後に示されている37の「音符、休符、記号や用語」も上記と同じような理由で「学力」を構成していると考えた。これらの学習状況は、ペーパー試験でクラス単位で容易に測定可能である。この第1の学力の獲得状況を明らかにした。その結果、小学校において、音楽科授業を唯一の音楽学習の機会とする多くの中学校新入生は、ほとんど「楽譜を見て歌う技能」を獲得していなかった。さらに、第2の「音符、休符、記号や用語」についても、表現活動に付随する強弱記号等以外のものの学習度は非常に低い結果であった。これらの結果から、小学校児童の音楽科学力の獲得状況は、非常に貧弱であると結論できる。

これらの状況からどのように脱するかを考えた。その時に、昭和47年に岐阜県古川小学校で実際に見学した「ふしづくりの教育」のことを思い出した。当時は鹿児島短期大学に勤務しており、夜行寝台を利用して古川小学校の研究会に参加した。第1学年の二つの音楽授業の参観と、体育館での「ふしづくり一本道」の実技講習および学年ごとのオペレッタ（すべて児童の作曲である）の発表があった。特に、第1学年の「おつかいありさん」と第2学年の「三匹のこぶた」の《家づくりの歌》には感動を覚えた。涙ぐみながらハンカチを握りしめている参観者も見られた。

この「ふしづくりの教育」について研究した。まず、山本弘（当時の県指導主事）、中村好明（同飛騨教育事務所指導主事）、中家一郎（同飛騨教育事務所課長、後に母校である古川小学校長として「ふしづくりの教育」を理論的に指導）、山崎俊宏（同古川小学校の音楽主任）等の人物の「ふしづくりの教育」との関連を解明した。次に、「ふしづくりの教育」の授業研究を行った。実際の授業の録音・録画を書き起こし、「ふしづくりの教育」の実践上の特徴を洗い出した。

定年退職後の勤務も退き、広島大学で非常勤講師として博士課程前期の授業を担当した。テキストとして、『小学校音楽科教育法—学力の構築をめざして—』（ふくろう出版）を使用した。それには「ふしづくりの教育」も簡単に紹介されている。この授業を受講した院生（岡崎藍・現山口県立長府高校教諭）が講師として某小学校に5か月間勤務して、3年から6年までの音楽の授業を担当した。「ふしづくりの教育」を実践した今回の授業で、3年生と6年生の児童から「ふしづくりはもうしないの？もったいなかったのに。」という趣旨の発言があったという。つまり、現在の子どもにも「ふしづくりの教育」の方法論的特徴は有効なのである。

現在の小生の研究は、「ふしづくりの教育」を実際に教育・保育の場で実践することである。小学校教育に関しては比治山大学の緒方満先生、就学前教育に関しては福岡女学院大学の福島さやか先生、特別支援教育に関しては熊本大学の藤原志保先生・西条特別支援学校高等部の松下友紀先生と共同研究を進めている。学生や院生のほとんどは中・高の教員になり、小学校に勤務することは稀である。周囲に初等教育と就学前教育の教員が少ないことが悩みの種である。紙幅の関係でこれ以上記述することができない。浅薄な記述となってしまった点をお詫びしたい。「ふしづくりの教育」の実践に関心のある方や、上記の研究の論文等に関心のある方は、yoshito@hiroshima-u.ac.jp に連絡ください。

2. 「学びを深める ICT 活用—音楽科教育の未来を考える—」意見交換会第1回・第2回

深見 友紀子 (大東文化大学)



昨年12月、音楽科教育におけるICT（デジタルテクノロジー）活用に関する意見交換会を立ち上げました。

日時：第1回：2018年12月2日（日）13:30-17:00

第2回：2019年2月24日（日）13:30-17:00

会場：大東文化会館研修室

参加者：大学の研究者、現場の教員、大学院生、
楽器メーカーや出版社などの関係者

第1回のプレゼンターは初山正博さん（都小音研電子楽器研究会顧問）。長年、電子楽器やデジタル教材に関わり、これまでの経緯をつぶさに見てきた先達として、「子供の深い学びを支えるデジタル教材の在り方」についてお話されました。

続く第2回のプレゼンター、小梨貴弘さん（埼玉県戸田市立戸田東小学校音楽専科教諭）の発表は、「ICT活用で進める音楽科のディスラプション—授業・行事環境の視点から—」。ディスラプションとは、従来の価値観を破壊して新しいものを創造するという意味の用語で、≒破壊的イノベーションです。ICT活用のトップランナーとしての情熱がタイトルからも伝わってきました。

構成は前半がプレゼンテーション、後半がディスカッションで、90分のプレゼンテーションの後、参加者全員が肯定的な感想やアンチテーゼを述べ、進行役である私がそれらをピックアップしつつ、議論を進めました。一つの話目が別の話題を呼び起こし、インターネットや文献では決して集めることができない意見、考え方に触れることができました。

新学習指導要領の実施に向けて、特別教室（音楽室を含む）においてもICT環境の整備を加速し、これらを適切に活用した学習活動の充実を図るべきであるとされました。この会を立ち上げたのは、学校全体でICTを活用した学びについて考えていかなければならない時を迎えているのに、音楽科では何をすべきなのかを、全教科の動向を視野に入れ、広い見地から検討しようという動きがほとんど見られなかったからです。また、主体的な学び・対話的な学びを実現するためにICTの特性や強みを生かしていくべきであることも明文化されたのに、小梨さんのような存在はまだ「点」にしかすぎず、「面」ではないことへの危機感もありました。

一般社会では、デジタルテクノロジーが新しい表現や新しい学びの方法を次々生み出しています。音楽室の設備や先生の意識が昭和時代からほとんど変化しないために、音楽科がデジタルテクノロジーの恩恵を受けられないのは残念であると思います。意見交換会は3回目以降も継続して行う予定です。同じ思いの方がいらっしゃったら、是非ご連絡ください。日時や場所が決定し次第、私からご案内します (fukami@ongakukyouiku.com)。

3. 音楽教育の本質的なありかたを求めて—降矢美彌子氏の仕事—

尾見 敦子 (川村学園女子大学)

2019年2月11日、「降矢美彌子のお別れの会」が福島市で行われ、本学会の会員をはじめ、降矢氏と関わりのあった150人の方々が集った。降矢氏はコダーイの教育哲学「音楽は全ての人のために music for everyone」に基づく多大な業績を遺したが、奇しくもコダーイの誕生日(12月16日)に75年間の生涯を閉じた。献奏として、ハンガリーの作曲家、クルターグ・ジェルジュ (Kurtág György, 1926.2.19-) がミヤコの訃報を知って作曲した「ミヤコの思い出 (Mijakó Emlékezet)」が、自身による演奏(ビデオ)で映し出された。降矢氏は世界的作曲家であるクルターグを師と仰ぎ、作品の世界初演を必ず駆け付けて聴いたという。そして奇しくもクルターグと同日に生を受けている。これらの二つの偶然が必然と思えるほどに、降矢氏の生涯の仕事は、コダーイとクルターグという世界的に著名な二人のハンガリー人と深くかかわっていた。

会の初めにハンガリーのテレビ局が東日本大震災後の降矢氏の活動取材し、ハンガリーで放映された番組が流れ、「芸術の根源に哲学が在る」と静かに語る言葉と表情に引き込まれた。会場には氏の半世紀にわたるおびただしい数の研究論文・評論、教育実践報告、演奏記録や映像記録が展示されていた。

降矢氏は、民俗音楽学者・作曲家・音楽教育家であったコダーイのように、一人で音楽家、研究者、教師の「三位一体」を目指し、音楽教育の本質的なあり方を追求した。音楽が真に「全ての人のためのもの」になるよう、教師自身の音楽的成長を促す丁寧な手引書・翻訳書を数多く遺した。だが猛スピードで昭和と平成を駆け抜けたため、志を全うすることができなかった。まことに残念である。氏の遺したものを共有・反芻できるようになればと願っている。



4 会員の声

1 外国につながるのある子どもたちをめぐる音楽の可能性

磯田 三津子 (埼玉大学)

現在、外国人人口が5%を超えている自治体が日本には約40ある。こうした外国人集住地域の小学校には、音楽をめぐる様々な活動が展開されている。例えば、Z小学校は、外国人人口が20%を超えるコリアタウンの中にある。Z小学校の子どもたちの約60%が韓国朝鮮につながりがある。Z小学校には、民族学級(国際クラブ)と呼ばれる韓国朝鮮につながりのある子どもたちが通う放課後の活動がある。5、6年生の子どもたちは、年に一度12月上旬ごろ行われる全校行事である民族学級(国際クラブ)発表会で、韓国朝鮮の伝統芸能であるプンムル(農樂)を演じる。発表会に向けて、子どもたちは、2学期の間、民族学級(国際クラブ)の時間内だけではなく、休み時間や放課後も自主的に練習する。一方で、日本人の子どもたちは、演奏の成功に向けて、彼らを応援するために何ができるかを考える。例えば、プンムルを上演するホールを飾る絵を描いたり、友だちにメッセージを送るといったアイデアを出し合う。このように子どもたちの民俗芸能の発表を応援しようという雰囲気は、学校全体に漂っている。

こうした韓国朝鮮の音楽を学習することは、もちろん人々の暮らしや生業を学ぶ国際理解の一つの手掛かりとなる。それに加えて重要なのは、なぜ、彼らが韓国朝鮮の音楽を日本で演奏するのかを知ることである。韓国朝鮮につながるのある子どもたちがそれらの音楽を演奏することは、より深く自分自身について考えるための糸口となるであろう。他方で、日本人の子どもたちにとっては、自らの民族性や出自を大切にしている人々の存在を知り、それらの人々とどのように関わって行くことができるのかということについて知ろうとする契機となる。

多くの場合、外国につながるのある子どもたちは、日本の学校に転入したら、日本語を学び、日本の生活になじむための適応教育を受けなければならない。その時、子どもたちは真剣で、緊張に満ちた堅い表情をしている。なじみのない言葉や生活に精一杯なのである。そのような時、彼らが母国の音楽を体験し、母国の文化の豊かさを知り、楽しむことができれば、その表情はきっと和らぐはずである。

ある大都市の繁華街には、7カ国以上の外国につながるのある子どもたちが通っている小学校がある。そこには中国、ロシア、韓国など様々な国の子どもたちがいる。フィリピンにつながるのある子どもたちも多い。そこで、小学校では、年に一回、フィリピン人のゲストティーチャーがティニクリン(バンブーダンス)を指導する活動を行っている。その活動のはじめから、子どもたちは、ティニクリンを体験する順番を待ちきれない。ようやく自分の順番がまわってきて、ティニクリンを体験している子どもたちの笑顔は印象的である。こうした様子から、子どもたちが自分自身につながるのある国、あるいは友だちの国の様々な音楽と関わることの大切さがわかる。

こうしてみると、音楽には、外国につながるのある子どもたちがルーツを誇り日本の中で解放されるために、そして日本人の子どもたちが彼らとどのように関わっていけば良いのかを学ぶきっかけとして大きな可能性がある。これからますます増加する外国につながるのある子どもたちをめぐる音楽が重要な役割を果たすことは間違いない。

2. 日本音楽教育学会に入会して

藤田 和也 (国指定重要無形文化財 江戸里神楽 若山社中・歌舞伎囃子笛方)

この度、入会させていただきました藤田です。私はどの教育機関にも所属せず、演奏活動を生業としています。歌舞伎や日本舞踊での演奏に加え、祭囃子や獅子舞等の演奏や舞方もしています。東京藝術大学を卒業後、様々な演奏活動を行って参りました。その一方で幼稚園、小学校、中学校、高校、大学での演奏や講義、ワークショップにも色々と参加させていただきました。その中で、現学会長の今川恭子先生に出会い、実践を通して学校の子どもたちにアプローチする方法などを学び、今後の音楽教育について考えるようになりました。

和楽器は日本の楽器です。しかし触れる機会は少なく、教育環境でも今後触れる機会が増えていくとは考えにくいように思います。このままでは和楽器は消滅の道を辿るのではないのでしょうか。このような環境が和楽器の負の循環の要因とも考えられます。子どもの頃から和楽器に触れて敷居を低くし、親しみ易くする必要があるでしょう。そのために教育現場にどのように導入するのが大きな課題です。そこで私は、自分の専門分野である〈歌舞伎芸能〉と〈民俗芸能〉を軸として、日本人の考え方や季節感、道徳教育に加え、地域に根付いた日本文化を教育に取り入れ、地域の芸能の継承者の育成等にも繋がることを目的に研究しています。

昨今は町の情緒や人々の繋がりに日本的感性が薄れてきているように感じています。和楽器の実践が日本の精神性や道徳観を後世に伝え、人間性を高める手段になればと思います。さらには町の至るところで和楽器が聞こえる日が来ると嬉しく思います。

3. 日本音楽教育学会入会にあたり

中野 圭祐 (東京学芸大学附属幼稚園)

この度、日本音楽教育学会に入会させていただきました、東京学芸大学附属幼稚園教諭の中野圭祐と申します。よろしくお願い致します。

実は2013年度に東京学芸大学大学院で学んでいた際に一度入会をし、学会での口頭発表をさせていただいたことがありました。それ以来、幼稚園における音楽的表現活動の指導の際に、幼児の多様な生活や遊びと、音楽的表現活動が関連性をもつような指導法について研究を進めてまいりました。一旦学会を離れておりましたが、更に学びを深めていきたいという思いで、再入会という形になりました。

幼児期に限らず、音楽教育のあり方には様々な考え方がありますが、その根底にあるべきなのは、表現の主体であり、学び手である子どもたちを軸にするということであると思っています。長年、教員養成大学の附属幼稚園で教員として子どもたちと接し、また、そこで学ぶ学生達と接してきました。その中で、幼児教育を担う保育者が、子ども達と一緒に豊かな感性を育み、そして保育者自身が豊かな表現者としてあり、子ども達がありのままの表現を楽しむことができるような保育のあり方や指導の方法について考えてきました。

保育の現場での自身の実践を含め、数多くの事例から今後も研究を進めていくと共に、諸先輩方のこれまでの研究から多くの学びを得ることで、日本の音楽教育の発展の一部を担っていけるように精進したいと思っています。

4. 会員の新聞・近刊等紹介

★井手口彰典著『童謡の百年—なぜ「心のふるさと」になったのか—』

筑摩書房 2018/2/15 四六判・320頁 ISBN978-4480016645 本体1,600円＋税

心にしみる曲と歌詞。まぶたに浮かぶ日本の原風景、童謡。だがそのイメージは常に今と同じであったわけではない。めまぐるしく変わる社会のなかで、童謡はどう歌われ消費されてきたのか。

★深見友紀子著『～保育所・こども園・幼稚園採用試験へ向けて～
みんなが知りたい！「音楽実技」対策』

ヤマハミュージックエンタテインメントホールディングス 2018/7/22 AB判・104頁
ISBN978-4636958294 本体1,800円＋税

採用試験での音楽実技対策を徹底解説。公立と私立の試験内容の違い、実際の試験会場の様子、ピアノ演奏や弾き歌い、初見演奏、伴奏づけのコツや練習方法などがバランス良く収録されており、保育者志望学生には必携の一冊である。試験間近な学生にもヒントが満載。

★吉田直子編著『なんのうたかな？ こどものうた50曲選』

ファウエム・ミュージック・コーポレーション 2018/12/6 A4版・89頁 ISBN978-4990588793
本体1,400円＋税

幼稚園教諭や保育士をめざす初心者のためのピアノ・歌のテキスト。クイズ形式で楽しく自然に、読譜力・リズム感・拍子感・音楽知識などを身につける。伴奏づけ・弾き歌いのワークブックにも活用できる。

★樫下達也著『器楽教育成立過程の研究』

風間書房 2019/1/31 A5版・354頁 ISBN978-4759922547 本体9,000円＋税

日本の初等教育における器楽教育はどのような歴史的経緯で成立したのか。音楽教育研究団体に着目し、現場教師の実践と楽器産業界および教育行政の関係を考察することで、器楽教育成立過程の構造的特徴に迫る。

「ニュースレターは会員のホットな情報交換の場」の方針の下、この頁ではみなさまからの投稿をお待ちします。書籍の他、CD、DVDなどのリリースもお寄せ下さい。書誌情報、基本的な音源情報に加えて「である調」90字程度の紹介文をお願いします。

投稿先アドレス ✉ onkyoiku アットマーク remus.dti.ne.jp, okushinobu2 アットマーク gmail.com

5 報 告

1 平成 30 年度第 4 回常任理事会

日時：2019 年 2 月 17 日（日）14:00～16:55

場所：聖心女子大学（2 号館 音楽室）

出席：今川、有本、今田、寺田（記録）、菅（道）、北山、佐野、島崎、坪能、藤井、本多、（水戸）

欠席：小川

【会務報告】〈2018 年 10 月 6 日以降〉

2018 年 10 月 6,7 日	日本音楽教育学会第 49 回大会（岡山大学）
10 月 28 日	平成 30 年度第 4 回編集委員会（学習院大学）
12 月 31 日	『音楽教育実践ジャーナル』vol.16, ニュースレター第 74 号発送
2019 年 2 月 11 日	平成 30 年度第 5 回編集委員会（明治学院大学）
2 月 17 日	平成 30 年度第 4 回常任理事会（聖心女子大学）

【報告事項】

1. 第 49 回大会（岡山大会）会計報告（小川→有本）

下記のとおり、会計報告がなされた。

【収入】	項 目	金 額 (円)
	日本音楽教育学会 大会準備金	700,000
	広告費・ブース出展費	690,000
	臨時会員	333,000
	大会プログラム 売り上げ	6,500
	懇親会費	704,000
	合 計	2,433,500

【支出】	項 目	金 額 (円)
	会場費	162,464
	会場費（常任理事会）	2,730
	アルバイト料	357,800
	懇親会費	584,360
	スタッフ昼食代（弁当+飲料）	67,856
	実行委員会経費（交通費+雑費）	247,455
	基調講演講師謝礼	120,000
	アトラクション謝礼	10,000
	記録（振込手数料を含む）、記録媒体	91,159
	日本音楽教育学会 返納金	789,676
	合 計	2,433,500

2. 第15回音楽教育ゼミナール（広尾ゼミナール）（坪能）

下記の通り会計報告があった。

『収入』	項目	金額 (円)
	学会準備金	300,000
	参加費	64,000
	懇親会費	160,000
	弁当代	38,400
	合計	562,400

『支出』	項目	金額 (円)
	資料作成費	20,000
	交通費	212,285
	講演料	50,000
	懇親会費	159,360
	弁当代	38,400
	引出手数料	324
	学会本部へ返金	82,031
	合計	562,400

3. 平成30年度会計中間報告（島崎・寺田）

平成30年度会計の見通しについて報告があった。

一般会計の収入については、会費未納分や例会運営費等の返金があるため、確定していない。会費未納分の回収に努力する。次年度以降の予算編成では、旅費・交通費を増額することを検討する。会計監査に向けて、大会実行委員会からの返金、例会運営費の返金を3月中に完了する。また、次年度補正予算については、APSMER 2021開催に向けて、国際交流基金を増額する。

4. 各委員会等報告

(1) 編集委員会（藤井）

第5回編集委員会（2019年2月11日）での審議内容を中心に報告があった。

- ① 『音楽教育学』投稿規定の改定案を検討し、第4回常任理事会に提案する。
- ② 『音楽教育学』第48巻第2号は、総100頁、研究論文1、研究報告1、研究動向1、書評2、大会報告、地区例会報告を掲載予定である。
- ③ 2月15日締切の投稿状況は、『音楽教育学』3本、『音楽教育実践ジャーナル』11本である。
- ④ 次回委員会は、2019年5月25日に開催予定

(2) 広報委員会（菅）

ニューズレター第75号の割付について報告があった。

(3) 国際交流委員会（坪能）

以下の報告があった。

- ① 新しい音楽教育を考える会主催のChi-Keung Victor Fung 氏の講演会(2018年10月20日)への支援として、50,000円支出した。
- ② 2019年度の国際交流に資する企画の支援について、支援希望申請が無かった。
- ③ 第50回大会でのプロジェクト研究と国際交流企画とを合わせて、立案する。

(4) 選挙管理委員会 (水崎→今田)

第1回委員会を2019年2月18日に学会事務局で開催する。

(5) 音楽文献目録委員会 (長野→今田)

第178回音楽文献目録委員会について報告があった。

(6) 学会賞審査委員会 (今川)

2019年度は学会賞を授与する年度であり、審査委員会が始動したことが報告された。

5. ISME Professional Association Partnership について (今田)

ISMEの従来のグループメンバーシップが廃止され、Professional Association Partnershipとなる予定であることが報告された。

6. 学会法人化検討ワーキンググループ (北山)

法人化に向けて、諸規定、会計システム、編集システムを次年度以降見直す必要があること、今後の役割分担と検討の進め方について情報収集することが報告された。また、一般社団法人である東洋音楽学会の情報が紹介された。

7. 設立50周年記念『音楽教育研究ハンドブック』について (加藤→今田)

入稿を終え、キーワード作成作業が行われている。2019年8月刊行予定。

8. 50周年プレ企画 シンポジウム「芸術教育の未来」について (今川)

2019年3月2日、聖心女子大学で開催される。

【審議事項】

1. 平成31年度補正予算案にむけて (島崎・寺田)

平成31年度補正予算案にむけて以下の方針の提案があり、了承した。

- ① 旅費・交通費の上乗せ
- ② 国際交流基金の大幅増額
- ③ 50周年記念研究出版の印刷費に75万円を計上

2. 第50回大会について

(1) 大会準備日程 (今田)

大会準備日程について提案があり、了承した。

(2) 大会発表応募要項 (今田)

大会発表応募要領について提案があり、了承した。

(3) 大会参加登録システム (今田)

大会参加登録システムについて、前年度の業務実績があることから、東武トップツアーズ(株) 広島支店を選定するとの提案があり、了承した。

(4) 大会実行委員会との覚書について (今田)

大会実行委員会との覚書について提案があり、了承した。なお、今川会長から、学会本部と大会実行委員会との信頼関係が重要であること、黒字を出すことを強めているのではなく会員のために支出すること等、返金についての基本的な考え方が説明された。

(5) 大会日程等 (今田)

大会日程等の提案があり、これを了承した。参加費は、次の通りとする。

予約参加費 4,000 円, 当日参加費 4,500 円

臨時会員参加費 (プログラム 1 部含む) : 両日参加 5,000 円,

一日参加 3,000 円, 学部学生 1,000 円

日程の詳細は今後決定する。各時間枠の設定、懇親会の名称変更 (情報交換会等) などを検討する。

(6) 常任理事会企画 プロジェクト研究 (坪能)

常任理事会企画プロジェクト研究について提案があり、了承した。

前年度の「学校と社会を結ぶ音楽教育」での T A S モデル (T : 教師 A : アドバイザー S : サポーター) を中心に授業を構成する意味や役割を考察する。Patricia Shehan Campbell 氏 (ワシントン大学), 高須裕美氏 (名古屋短期大学), 岩井智宏氏 (桐蔭学園小学部) に依頼している。

(7) 大会実行委員会企画 (佐野)

大会実行委員会企画および日程素案について提案があり、了承した。

実行委員会企画のテーマは「音楽教育学を展望する—隣接諸科学からの期待—」(仮) を考えている。

日程素案について、共同企画の時間枠の工夫、院生フォーラムの設定について意見が提出され、実行委員会で検討する。

3. 平成 31 年度ワークショップ (弘前ワークショップ) について (今田)

平成 31 年度ワークショップ (弘前ワークショップ) について、2019 年 8 月 11 ~ 12 日に青森県弘前市で「ローカルな芸術経験を目指して—アンサンブルの即興性・同時性—」をテーマに開催することが提案され、了承した。

4. 第51回大会候補地について（今川）

京都教育大学を第51回大会候補地とする提案があり、了承した。

5. APSMER 2021 日本開催について（本多）

APSMER 2021 日本開催準備に向けて、実行委員会の構成が提案され、了承した。

6. 新入会員及び退会者について（今田）

2019年2月6日現在の新入会員及び退会者について説明があり、了承した。

◆ 新入会員 13名 (平成30年10月5日理事会以降)			
	会員番号	氏名	所属先
個人情報につき削除			
◆ 正会員申出退会 10名 (平成30年10月5日理事会以降) 個人情報につき削除			
◆ 正会員 申出退会予定者 14名 (平成30年度末まで会員資格あり)			
◆ 自然退会正会員 (平成31年5月末に2年未納だった場合、平成30年度をもって退会56名)			
◆ 自然退会学生会員 (平成31年5月末に2年未納だった場合、平成30年度をもって退会1名)			

2019年2月6日現在 正会員 1592名 学生会員 6名 名誉会員 2名 特別会員 3名

7. 『音楽教育学』の投稿規定の改定（水戸）

『音楽教育学』の投稿規定の改定について提案があり、継続審議となった。

8. 事務局より

3月末～5月末までの選挙業務にアルバイトを雇用したいとの提案があり、了承した。

【今後の会議予定】

平成31年度 第1回理事会・常任理事会

2019年4月28日（日）14:00 場所：聖心女子大学

6 事務局より

事務局長 今田 匡彦

1) 第50回大会:

10月19日(土)・20日(日)の両日、東京藝術大学にて開催予定です。多数のご参加をお待ちしております。発表募集(共同企画・口頭発表・ポスター発表)の締切は6月13日(木)15時です。申込手続きの詳細は随時学会 website にてお知らせ致します。

2) 年会費の納入をお願い:

納入期限は5月31日(金)です。期限内に会費を納めなければ、その後の送付物、研究発表や論文投稿に支障が出る場合があります。なお、2年間会費を滞納すると自然退会となりますのでご注意ください。大会での発表を予定されている方は2019年度までの会費を5月末日までに納入する必要がありますので、ご注意ください。入会して発表することを希望される方は5月末日までに入会申込と会費納入を完了してから応募して下さい。

3) 住所、所属、メールアドレス変更について:

学会 website の「変更手続き」にてお願い致します。「所属地区」の変更も同時にお問い合わせ致します。

4) バックナンバーの販売について:

『音楽教育学』『音楽教育実践ジャーナル』のバックナンバーを販売しております。お得なセット販売も行っております。詳しくは学会 website をご覧下さい。

【編集後記】

三寒四温と申しますとお寒い寒暖の差の激しい今日この頃ですが、このニュースレターがお手元に届く頃には各地で花の便りが聞かれていますでしょうか。ニュースレター75号をお届けいたします。本号では、本学会の大きな節目となる50回大会(東京大会)のお知らせをはじめとするさまざまな情報、また「音楽教育の窓」「会員の声」それぞれ3名の方からご寄稿いただきました。

本号が平成最後のニュースレターとなります。元号の改まる次号では、広報委員一同、新たな気持ちでより充実した紙面づくりを目指して頑張ります。引き続き会員の皆さまからのご報告や情報をお待ちしております。

(木村 充子)

投稿先アドレス✉(半角で) onkyoiku@remus.dti.ne.jp

【日本音楽教育学会事務局】

所在地: 〒184-0004 東京都小金井市本町5-38-10-206

Tel. & Fax.: 042-381-3562 E-mail: (半角) onkyoiku@remus.dti.ne.jp

私書箱: 〒184-8799 東京都小金井郵便局私書箱26 *郵便物は私書箱へ

開局日時: 月・水・木 9:00~15:00

事務局員: 亀山・若尾・宇田川